

森部 豊著

『ソグド人の東方活動と 東ユーラシア世界の歴史的展開』

石見 清 裕

書名の「ソグド人」とは、イラン高原ではなく中央アジア・ソグディアナを故郷とするイラン系民族であり、盛んに内陸シルクロード貿易に従事したことで知られる。そのソグド人の活動のうち、本書がカバーする時代は八〜一〇世紀、舞台は中国である。

この時代の中国は唐・五代・宋初期にあたり、世界帝国ともいわれる唐王朝が安氏の乱で変質し、藩鎮の跋扈と五代十国の分立を経て、北辺・西辺を領土から切り離した形の漢人王朝的な宋へと向かう歴史をたどる。従来の中国史研究では、この唐後半期から北宋へと展開する国家・社会構造の変化の歴史を、政治面では門閥貴族の没落と君主独裁制の確立、経済面では貨幣経済の進展、文化面では復古主義の台頭などを指標として「唐宋変革」ととらえる傾向にあった。本書は、この構造変化の流れに対して、ソグド系・テュルク系などの民族の中国への移動と、中国内での彼らのさらなる移住、およびそれらが連鎖反動的に中国史に及ぼした影響にスポットをあて、そこからあらためて当該時代の史的展開を考え直そうとした意欲的な研究である。

著者森部豊氏は、「ソグド系突厥」という概念の提唱者の一人

である。森部氏のいう「ソグド系突厥」とは、肉体的・外見的特徴から見ればソグド人であるが、長期にわたって突厥人社会で暮らしてきたために生活面では騎射技術などの突厥文化を身につけたソグド人を指す。日系ブラジル人とカスペイン系アメリカ人などというのと同様の表現である。この概念を提唱することによって、著者は当該時代の新たな一側面を照射し、これまで多くの論考を発表されてきた。ソグド人というと商人だと思っている人が本書を読めば、きつと驚くであろう。

本書の母体は、著者が二〇〇三年に筑波大学へ提出した学位請求論文であるが、その後の研究成果も取り入れて全体を再構成しており、大変わかりやすくまとめられている。

手順として、まず各章を簡単に要約して紹介しよう。

* * *

冒頭の「序論」では、問題の所在と分析方法を提示する。上述の中国史研究でいう「唐宋変革」期は、同時に北アジアにおいても大きな変革期にあたり、従来の研究ではこの両者がどのように連動するのにかつての視座が欠如していた。そこで本書は、この問題を解明するための具体的なテーマとして、①中国華北の藩鎮のあり方、②安史の乱の展開、③沙陀族の動向の三点が、騎射技術を身に付けた民族の中国移住とどのように結び付くのかという問題を設定する。

第一章「北中国東部におけるソグド人の活動と聚落の形成」では、安史の乱（八世紀中葉）以前におけるソグド人の中国との交流、および東方移住の足跡をたどる。交流の跡は後漢時代からす

でにうかがわれるが、ソグド人の中国移住は北魏以降、また聚落の形成は北斉以降と見る。唐代における聚落形成地として恒州・定州・幽州・營州を例に取り上げ、ソグド系住民の結束が維持されている様相を明らかにする。これらの地は河北の駅道沿いに位置し、ソグド系住民の中には「店」「行」の関係者も見られるので、移住の背景に商業ネットワークの存在が推測される。

第二章「安史の乱前の河北における北アジア・東北アジア系諸族の分布と安史軍の淵源」では、まず河北に置かれた鞞糜州を整理する。多くは、突厥・契丹・奚・靺鞨の降付民を対象として管州（遼寧省朝陽）・幽州（北京）管内に置かれ、それらは契丹の反乱を契機に山東・河南に移されるが、契丹の再帰順と突厥第二可汗国の衰退によって再び河北に移置された。その再置先が幽州管内であり、これが安史の乱と関係する。そこで本章後半では、契丹・奚・靺鞨出身者が鞞糜州民を率いて安史軍（安史の乱の主體軍）に参加した姿を描く。鞞糜州に折衝府が置かれていたことと、右の軍人たちが折衝府を通じて鞞糜州民を動員したとする指摘は重要である。なお、鞞糜州のうち「濠州」は「降胡州」とされ（『新唐書』地理志七下）、突厥から降付した「ソグド系突厥」である可能性が匂わされる。

第三章「七～八世紀の北アジア世界と安史の乱」では、安史軍の構成を概観し、前章の鞞糜州軍以外にソグド系武人が数多く認められる点を指摘する。彼らこそソグド系突厥の流れを汲む者たちであり、その安史軍への合流経路は、①唐がオールドスに置いた鞞糜州「六胡州」から合流した者、②突厥第二可汗国衰亡時に幽州に移住してきた者、の二系統に分けられる。このほかに前章の

奚・契丹等の鞞糜州兵も合流し、節度使配下の漢兵とともに、安祿山の「蕃漢連合軍」が形成された。安史軍のうち、非漢族部隊の形成の流れがこれほど具体的に示されたのは初めてのことではなからうか。本章で始めて「ソグド系突厥」が本格的に取り上げられる。

第四章「ソグド系突厥の東遷と河朔三鎮の動静」で扱われる「河朔三鎮」とは、盧龍・成徳・魏博の河北三節度使を指す。これらの三鎮が、唐後半期の多くの時期に長安政権に離反し、独立的勢力として存続したことはよく知られている。本章は、その三鎮勢力に安史軍の残存、特にソグド系突厥が武人として入り込んでいることを指摘する。その意味で、河朔三鎮はむしろ安史軍がそのまま残留したかのような藩鎮なのである。ただし、一口にソグド系武人の残存とはいっても、成徳軍には安史軍のうち李宝臣が率いたソグド系突厥の残存勢力が入り込むが、魏博軍には安史の乱終結時にオールドス方面から移住したソグド系突厥が新たに合流する違いがあるという。やがて魏博軍はソグド系軍団が兵力の中核を形成し、ソグド系節度使を誕生させる。河朔三鎮に非漢族武人の存在することは知られていたが、その具体像を抽出し、出自を分析して三鎮のあり方が論じられたことは、これまででなかったといつてよいであろう。

第五章「河東における沙陀の興起とソグド系突厥」では、唐末に大勢力に発展してやがて五代史の主役となる沙陀族に、ソグド系突厥が合流してその一翼を担っていたことを論じる。沙陀の出自は西突厥の一派とされるが、黄巢の乱を平定して李克用をリーダーに山西北部で勢力を強めた時期には、その集団内にソグド姓

をもつ者が史書に散見される。彼らは沙陀のうちの薩葛(索葛・薛葛)部と安慶部の族長として現れ、その集団こそが八世紀末に河東節度使によって「雲・朔の間」(大同盆地)に移住させられたかつての六州胡の末裔であると説く。そして、五代期になると、後晋を建国した石敬瑭が契丹に燕雲十六州を割譲したため、大同盆地のソグド系突厥も契丹の支配下に入らざるを得なくなったが、それを嫌った安慶部は後晋に亡命し、それを宋は禁軍に組み込んだという。唐宋交代の流れを、沙陀のソグド系突厥に視座を置いてその連続性を論じた重要な指摘といえよう。

第六章「北中国における吐谷渾とソグド系突厥」では、その宋代のソグド系突厥の姿を、一〇世紀末の石刻史料(定州・淨衆院舍利塔の塔基碑室内にあった石匱)に刻まれた施舎者の姓名を使って浮かび上がらせる。章題の「吐谷渾」とは、もとは青海地方に分布していた民族で、唐末の史料には「吐渾」「退渾」なども記されて、沙陀の一部として現れる。そして、本石刻に見えるソグド姓の者はその吐谷渾の指揮系統に入っており、その指揮系統は「吐渾第三指揮使」のごとくに記され、どうやら第一―第五の系統が確認できる。唐末に山西北部に移住して沙陀の一部を形成した吐谷渾は、五代の沙陀王権に從属して宋初の禁軍に編成された。その吐谷渾禁軍中にソグド系武人の名が見えることは、前章の安慶部だけでなく、より広範圏に存在したソグド系突厥が宋朝禁軍に利用されたことをうかがわせる論じられる。隋・唐初の吐谷渾を宋代にまでつなげたのは、本考察が初めてである。

以上の考察を評者なりにまとめてみれば、次のようになるであ

ろう。

① 北朝末期以降、中国河北にはソグド人移住者の聚落の存在が確認されるが、それらは商業ネットワーク沿いに分布・形成されたと思われる。彼らは、突厥第一可汗国崩壊後に突厥から中国に移住したソグド系突厥とは別の形態である。

② 安氏の乱には、突厥・契丹・奚・靺鞨の靺鞨州民は折衝衛を通じて反乱軍に動員され、ソグド系突厥の一部も合流した。ただし、ソグド系武人にはオルドスの六胡州からの合流者、および突厥第二可汗国衰亡時に幽州方面に移住してきた者が含まれる。

③ 安史の乱が終息しても、ソグド系突厥の残存兵たちは河朔三鎮の節度使軍に入り込んで存続した。その上、魏博節度使軍には反乱終結時にオルドス方面から移住したソグド系突厥も合流し、これが魏博軍のソグド系節度使誕生に結びついた。

④ 一方、オルドス六州胡の別の一派は、河東節度使によって大同盆地に移住させられ、これが吐谷渾などとともに沙陀の勢力の一部を形成した。後にソグド系突厥兵は五代王朝の禁軍に入り込み、それが宋代の禁軍の一翼を担うことになった。

⑤ また、河北に分散したソグド系突厥の兵士の中にも、吐谷渾の指揮系統下に入って宋朝禁軍の一部を構成した者が確認され、ソグド系突厥は宋代まで存続した。

右の要約は、本書「結論」と照らし合わせても、ほぼこのように理解してよいと思う。なお、補論一「安史の乱の終息と昭義の成立」、同二「昭義を通して見た唐朝と河朔三鎮との関係」は、昭義節度使の成立過程と、第四章の成徳・魏博と唐朝の間で昭義

が果たした歴史的役割を分析した論考。森部氏が藩鎮の分析から研究を始め、その藩鎮勢力の中に見えるソグド姓武人の追求によってソグド系突厥の概念に辿り着いた道筋がうかがわれる。末尾の資料一―八は、本論で使用した石刻史料の情報整理または録文を提示したものである。

* * *

さて、以上のように見てくると、本書の考察の根底にはつねに「ソグド系突厥」の概念が流れていることがわかるであろう。本書で描かれるソグド人のほとんどは武人であり、かつて考えられていたような商人としてのソグド人ではない。著者森部氏は、わが国における「ソグド人＝商人」のイメージを覆した立役者の一人なのである。評者が学部・大学院で勉強していたころ、本書にも登場するオルドスの羈糜州「六胡州」の住民が突厥人なのかソグド人なのかは大問題であり、なかなか解釈がつかなかった。また、「資治通鑑」を読んでいると、安史の乱でなぜ「深目高鼻」の人が多数犠牲になっているのか、理解できなかつたものである。それが、ソグド系突厥という概念を導入することによって、ようやく腑に落ちた感を抱いた。しかも、それが沙陀の勢力構造の解明を大きく進展させ、さらには宋代禁軍にまで結びつき、唐宋の「変革」面だけでなく「連続」性を認識の表面に浮かび上がらせた手腕は、高く評価されるべきである。

それを可能にしたのは、現地調査を含めた、著者の永年にわたる石刻史料の収集と分析にあるといつてよい。本書の特徴の一つは、石刻史料を縦横に駆使して論を組み立てている点にある。特

に第四章は白眉であり、第六章は史料の存在指摘そのものが歴史学上の一つの新発見ともいえるほどである。これらの石刻を、著者はすでに訳注にして学界に提供してきたが、本書はそれらを末尾「資料」編に示し、本論では行論を平易に辿れるように組み立て直されている。この点でも、本書は読者に好感をもつて迎えられるであろう。

ただし、あらためて本書の説くところを考えると、突厥第一可汗国から中国に移住した多数のソグド系武人が、安史の乱に関与し、河北藩鎮の展開に一役買い、沙陀勢力の一翼を担い、宋初禁軍の一部をも構成したという、いわば現象面の筋道を跡付けた研究である。これらの現象をひきおこした各勢力なり、その在地のあり方なりの静的構造を主として分析した研究ではない。もちろん、それには極めて史料的制約を受けて困難な問題なのではあるが、たとえばソグド系突厥とそれ以前に聚落を形成した商業ネットワークとの関係は深く掘り下げられないので、第一章と第二章以下とが有機的に結び付かない印象をうける。

しかも、本書の分析方法は、在来史料には見られなかつたソグド姓の者を石刻から抽出し、それらをソグド系突厥の概念でつなぎ合わせるという手法である。それによつて、唐代の各時代の画期ともいふべき現象に連鎖性を導き出した点は高く評価されるべきであり、評者はそれらの作業がいかに労力を要するものであるかは十分に認識しているつもりではあるが、そうはいつてもこの手法だと、武人的性格を帯びて現れるソグド姓を冠する者がすべてソグド系突厥になってしまうのではないかとこの危惧を覚えるのである。

そもそも、キャラヴァン交易を行うソグド人が自己防衛のために武装するのは当然であり、集団として見た場合に商人と武人とは表裏一体のものであることは、すでに森安孝夫氏によって説かれていた（たとえば森安『シルクロードと唐帝国』、講社社、二〇〇七年、一一三―一七頁）。また、中国移住のソグド人を見ても、寧夏回族自治区固原市南郊出土のソグド系史氏一族の墓誌を例にあげれば、彼らは北魏末期には聚落を形成して血統を存続させているので、本書のいうソグド系突厥にはあたらないが、それでも一族は唐初までは武人として行動しており、その後は牧馬管理によって唐の馬政に関与している（ソグド人墓誌研究セミナール「ソグド人漢文墓誌訳注」(1)〜(7)、『史滴』二六〜三二、二〇〇四〜一〇年参照）。また、涼州（武威）の安氏をはじめとするソグド人が、軍団を形成して隋代から軍事行動に携わっていたことも、山下将司氏によって明らかにされている（山下「隋・唐初の河西ソグド人軍団」、『東方学』一一〇、二〇〇五年）。

以上のようなことは、森部氏には言わずもなであるが、本書第一章のソグド人聚落に右のような性格をまったく見なくてよいかどうか。場合によっては、第二章以下の解釈に関わりかねないのである。

ところで、本書の主題である「ソグド系突厥」という概念は、中田裕子氏によっても提唱されている。中田氏は、オルドス「六胡州」の反乱を分析する前提として、その住民はソグド人との混血などのためにソグド姓を名乗るものの、あくまでも「突厥人」であると結論づけられた（中田「唐代六胡州におけるソグド系突

厥」、『東洋史苑』七二、二〇〇九年）。また、ヴェシエール氏の『Les Huioux Turco-Sogdiens』という概念は、より広くシャーシから甘肅までの遊牧・定住両地帯を念頭に置き、主としてソグド人がテュルクに移住して融合した形態で、商業を中心にしたながらも両地帯の政治・外交上の橋渡しの役割を演じた人々を指している（Étienne de la Vaisière, *Histoire des marchands Sogdiens*, Paris 2002, trans. by James Ward, *Sogdian traders: a history*, Leiden, Boston, 2005, pp.199-225）。つまり、ソグド系突厥とは、主体はソグド人なのか突厥人なのか、あるいはどちらともいえないほど融合した人なのか、微妙に見解が分かれるのである。たとえば、「康阿義屈達干神道碑」、『顔魯公文集』六、『全唐文』卷三四二）に描かれる墓主は、康姓を名乗るがその一生はどう見ても突厥人として送っており、この点では中田説が妥当のように思われる。その一方で、そうだとすると、本書に登場するような河北各地に分散した多くのソグド系突厥が、なぜ後世までソグド姓を名乗り続けるのかという問題になると、森部説が妥当に思われる。

実際には、唐代の中国においては森部説・中田説両方の形態が存在または混在していたであろうと考えるのは、容易である。しかし、ことはそう簡単ではない。なぜなら、両者の研究にはともに分析対象の中心にオルドス「六州胡」があるのであり、その結論いかによっては本書全体の理解に関わりかねないからである。ただ、いずれの説によるにしても、ソグド系突厥とは戦闘にあたっては騎射で戦う集団を含む点では共通しているといってもよいであろう。

わが国で「ソグド系突厥」が提唱された時期は、今世紀初頭と思われる。中田氏は修士論文ですでに提唱されたというし、さらには齊藤勝氏もほぼ同じころに同じ用語を使用したと聞く（まだ活字化はされていないようである）。ヴェシエール書もそのころに出版されていることを考えあわせると、その意味する内容は微妙に異なるとはいえ、ほぼ同時期に四名の研究者によって同じ用語が使用され始めたといえる。ソグド・突厥関係史の研究を突き詰めているうちに、ちょうど機が熟したとしかいいようがない。

その中でも、本書の著者森部氏は、中国各地を調査して精力的に研究を進め、ソグド系突厥の歴史的展開に見通しをつけ、次々と唐代史の新事実を発見し、それらを本書に結実された。氏の研究によつて、中国に移住したソグド人の形態がより明確になってきた。すなわち、その形態とは、①商業活動を目的として来た者、②北魏末期以降に移住して聚落を形成した者、③突厥絳由に移住したソグド系突厥、の三種の形態である。従来は、これらを混同していたのである。本書は、このうちの主として③を掘り下げた論考であり、そして③の一部の六州胡の解釈が中田説とは異なっていることになる。さらにいえば、③に西突厥絳由の形態を想定

しなくてよいか、あるいは上述のように②が武人として活動する形態を想定しなくてよいかどうかという問題も残されるであろう。しかしながら、それらは、むしろ森部氏の研究によつてより明確に認識できるようになった問題点なのであり、決して本書の価値を落とすものではない。

唐という時代は、中国史の枠組みですべてが解けるものではないのであり、そのことは本書によく示されている。本書は、これまで著者が発表した論文の一本を一つの章にして構成された研究書ではなく、書き換え組み替えて論旨を一貫させている。図版類も豊富で、非常にわかりやすい構成をとっている。唐代史だけでなく他の時代に関心を持つ人にも、さらには中国以外の地域・民族の歴史に関心をもつ人にも、是非一読を勧めたい。

(A5版 三七九頁 二〇一〇年三月)

関西大学出版部、二〇一〇年三月

(巨稲田大学教育・総合科学学術院教授)